

---

# 闇より黒い

狼之羊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇より黒い

### 【Nコード】

N6393C

### 【作者名】

狼之羊

### 【あらすじ】

人間と「人間の異形の者」は長く争いを続けていた。人間に憎しみを燃やす異形の者フウマは、謎の少女ルリと出会い、少しずつ心を変えていく。しかし、ルリの体には恐ろしい力が眠っていた。

## 序（前書き）

初投稿です。

下手な小説ですが、読んで頂けたら幸いです。

## 序

いつも青白い光を放つ月が今日に限って赤かったのを、ルリは一生忘れられないだろうと思った。

冷たい夜だった。

何時間も吹き晒された肌は体温を失い、感覚もない。

何も言わず、ただ翼を動かすクルリは、疲れからか息切れが激しかった。

気軽に休もうか、とは言えない。クルリも休みたいとは言わない。

今はただ、こうして飛び続けるしかないのだ。目指す場所が遠いか近いのかも、ルリには分からない。分かる事はそこに辿り着かなければ、自分もクルリも死ぬという事だけだった。

一夜にして、沢山のことを失った事を、ルリはほとんど自覚していなかった。

意識が朦朧としている今では、今日何が起こり、どうして森を彷徨っているのかも分からなくなっているかもしれない。

ルリの虚ろな黒い瞳には、木々の切れ間に時々見える、赤光の月が映っていた。

かん高い鳥の声が一際大きく鳴り響いた。この樹海全体の動物への警戒音だ。

大木の合い間に顔を出す岩の、一番見晴らしの良さそうな所を選んで、少し小柄な少年がその大岩に飛び乗った。

髪は冷酷を孕んだ銀色。瞳の色は狂気を帯びた金色。

無駄のないしなやかな動きは、まるで豹か何かの動物のようだ。鋭利な目つきで依然として鳴り止まない鳥の警戒音の響く樹海を眺める。

余程の事では、これほど鳥が警戒する事はない。この音が鳴り響く

のは、たった一つ。

人間の侵入を確認した時だけだ。

少年は注意深く辺りを警戒しながら、しばらく緑一色の鬱蒼とした森を眺めた。

ハンターは獲物を捕捉してからでなければ動かない。

やがて、少年は何かを見つけ、微笑んだ。

その笑みは、決して少年の持つ無邪気なものではない。獲物を見つけ、その命を狩れる事に至上の喜びを得たハンターの笑みだった。

次の瞬間、少年は何の反動もつけず、視線の先へ跳躍していた。それは、跳躍というより、もはや飛翔だった。

着地を待たず、木々の枝に掴まって勢いを殺し、森の奥へ目を凝らす。

昼間とはいえ、この樹海は薄暗い。獲物の元に正確に降りられたのか、確認しなかった。

少年の6・0の視力は森の奥へひた走る、獲物の背中を捉えた。ピンゴ。

少年の獲物は六人いた。全員、弓と矢筒を背負っているのを見ると、どうやら弓矢隊からはぐれたらしい。

人間達は誰もが必死の形相で逃げている。何かから逃げている。

彼等は本能で知っているのだ。走れなくなった時が世界の終わりだと。

だから逃げていた。彼等は誰一人知らない。彼等の世界を終わりにするものは、すぐ後ろに、少年が地面を一蹴りした瞬間には、すぐ横に迫っていた事を。

少年の手には武器は何もない。しかし少年は慌てたりしなかった。武器とは人間が使うものである。狩りに使うのはこれだけでいい。よく研がれた人差し指の爪。

六人はほぼ二列で走っていた。隊列を組む訓練で、そう走るよう習ったのだらう。

彼等人間の目では捉えることは出来なかったが、少年はジグザグに

縫うように、その列を走り抜いた。

その時間は、刹那だった。

抜かした六人を少年は振り返った。その時、耐え切れなくなったように、六人から血が吹き出す。ほぼ同時に崩れ落ちて、二度と動く事はなかった。

少年は人間の骸をべつして、踵を返そうとした。

「埋めてやろうぜ、フウマ。」

鳥の声も収まった、全く音のない森に突然声が降って来た。

フウマと呼ばれた少年は睨むように自分のすぐ右側にある木の枝を見上げた。そこに気配がある。

「…シユン。」

シユンと呼ばれた人物は自分の居所がバレたと知って、ゴソゴソと降りて来た。

長身の青年が生い茂った葉の中から姿を現した。

「俺の監視か？ご苦勞な事だ。」

シユンは手近な太い枝に長身の体を窮屈そうにたたんで座り、愉快そうに笑った。

「気にすんな。好きでやってる。」

茶髪で色素の薄い黄色の瞳。その笑みには、人馴れした猫のように、したたかで人懐っこい雰囲気かじみ出ている。

「何だよ、驚かせたつもりだったのに。尾行がバレてたのか。」

「これだけ近ければ、誰でも分かる。」

そんな事はないはずだ、とシユンは思った。気配を消す技法は誰かに負けていると思わない。

それでもフウマが見破るのは、それだけこの少年の五感が研ぎ澄まされているからだ。

「お前、最近また感覚が鋭くなっただんじやないのか。」

「お前の尾行の腕が落ちたんだろっ。」

「あ、ちくしょ。お前俺をなめてるな！年上は敬え！」

フウマはやってられないというように、シュンの声を無視して歩き出した。その進路を遮るようにシュンが枝から飛び降りる。

「待って。埋めてやろうぜって言ってるじゃん。」

死体を埋めるのは人間の習慣だ。シュンも特に意味を持って言っているのではなかった。ただ、人間の死体は人間流に葬るのが一番いいと思ったのだ。

「一人でやれよ。俺の知ったことじゃない。」

フウマは何の温度もない声で言った。そこに、悲しさや悼みの念は見出せなかった。

シュンは今度は何も言い返さない。断られる事は言う前からわかっていた。

ただ、時にはこの少年が心を持っている事を確かめたい。

どという答えが返ってくれば、心の証明になるのか。それはシュンにも分からなかった。

## 第一話 出会い

深い深い樹海があつた。

その樹海は、はるか古代からその姿を変えず、季節によつて葉が紅葉する事もない。いつも同じ、深緑色だ。

その事から、この樹海は常緑の森と呼ばれていた。

この常緑の森に集落を築き、生活する者を【異形】と人間は呼ぶ。

朝からフウマは石造りの床を飛ぶように走っていた。彼が走ると、冷たい月光を凝縮したような銀髪がサラサラとなびく。父親から受け継いだその髪色は、沢山の人の中に紛れても一瞬で見つけることができる。異形の中でも珍しい色なのだ。

フウマの住む集落の家々は大概が石造りである。人間の生活圏に近い、森の入り口近辺に位置するここは、昔は人間に焼き討ちを受けて、ひどい損害を被った。石造りに変わってから火の被害は上っていない。

土に比べると、石の床は随分走りにくいとフウマは思った。心持ちも関係しているかもしれない。

母に呼ばれると、何故かいつも気が重かった。

「入ります。」

広い一間に玉座が据えられている。村長が座る場所だ。

七年前はフウマの父が座っていた。

今は母が座っている。

「フウマか。待っていた。」

男のようなしゃべり方で母は言った。サソリと言う。髪は黒く、フウマと同じ金色の瞳。年齢不詳の肌は張りつつやで保たれている。村長になる前は女性の中にもたくましさのある笑い方や仕草が目立ったが、村長になってからはどこか男らしい態度でいることが多い



った。

死んだ父代わりになろうとしているのかもしれない。

父の死は衝撃だった。

父があんな死に方をして、自分だけのうのと生きていられないと思った。

死ぬ事が許されないと分かった時、何かが自分の中で変わったのだ。壊れた、というのかもしれない。心が頭に何も伝えてこなくなった。それはフウマにとって、ひどく楽な事だった。自分がやるべきは、一戦士として、課せられた人間の殺傷。それを全てにして、生きていけばいい。

父の跡を継いで村長になろうとは微塵も考えなかった。母が村長に推されて就任した時も、何も思いはしなかった。今のように少し、気が重くなったのを感じただけだ。

それからのフウマは悲しいとも嬉しいとも思ったことはない。心はいつも空白で、ただ、思考とは隔たった遠い場所で、時々もやもやした疼きを覚えるのみだ。

「さあ、報告を始めてくれ。」

「……何度も言うようですが、俺に言う事はなにもありません。こんな報告会などやめにして下さい。」

村長になったサソリにフウマは敬語しか使った事がない。

「何もない、という事はないだろう。シュウに聞けば、お前は昨日、人間を六人も仕留めたそうじゃないか。何でもいい。些細な事でも報告してくれ。」

サソリは痛みに耐えるように目を細めて言った。

フウマは変わらず、黙ったままだった。

フウマが出て行ってから、サソリは深い溜息をつき、玉座の後ろのつい立に向かって話しかけた。

「シュン、今日もあの子を頼むよ。」

「……ウス。」

つい立からふわりと出てくると、シュウはあっという間にフウマを

追って出て行った。フウマが生まれる前は村一速い足の持ち主だったのだ。

一人になると、サソりはぼんやりつい立を眺めた。

銀色の毛並みを持った獅子の絵が描かれている。獅子は鋭い目つきをしているようにも、優しい目をしているようにも見えた。自分の夫、ザンシャが村長になった時に描かれたものだ。ザンシャは本当にこの絵の獅子のような男だった。

触れると針金のように固い、美しい銀色の髪が好きだった。どんな戦からも生き残る強さが好きだった。何より好きだったのは、鋭くも優しい目だった。

生まれた息子は夫の銀色の髪と自分の金色の瞳を持った、明るい子供で。何も望まない位幸せな日々で。

その記憶は大事に心の奥にしまっている。

「どうすればいい……？」

サソリは獅子に話しかけた。

「あたしはあの子に何をしてやればいい……？」

獅子はいつまでも何も答えなかった。

フウマは森の中を駆けていた。道などない。木が隙間なく立ちほかかる所をだ。

速度は普通の人間では目で追えない位である。

フウマはとにかく走る。走っている間は、何も考えなくて良かったからだ。

考えれば考えただけ頭の奥がざわつく。それは煩わしい。

「ちょ、ちよつと待て、休憩！一時休憩ー！！」

上から降ってきた声に、フウマは急停止した。

木の上からガサガサ葉を落しながらシュンが地面に降りてきた。肩で息をしている。

「お、お前ちよつとは俺を氣遣って歩け！追いつけなくなるだろう

が。」

「追いついてこなければいいだろう。」

「そうは行くか。お前の護衛は村長の命令だぞ。」

フウマはシュンが傍に付いて離れないのを監視と呼ぶが、シュンは護衛と呼んでいる。

森には人間の斥候が時々潜んでいて、小規模な戦闘はほぼ毎日起きていた。

そのため、村を出て森を巡回する自警団が村の若者を中心に発足している。入れるのは二十歳を過ぎた者からで、十六歳のフウマがそれに加わっているのは異例の事だった。

フウマの強い希望と、村長の判断で、シュンを同行させるのを条件にフウマは森を巡回する役目を掴み取った。

また駆け出そうと足に力を込めたフウマを見て、シュンは慌てた。まだ息が上っている。

その時、大声が樹海を突き抜けた。

「フウマ様！フウマ様あー！！」

その声の主はすぐわかった。フウマを様付けで呼ぶのは、自警団でただ一人だけだからだ。

「な、なんだよウオンの奴、大声出して。まさか襲撃か？」

普段、自警団がお互い呼び合う事はない。人間にかち会った時でも各個撃破が基本だ。

尋常じゃない呼び声にシュンは緊張を走らせた。フウマはすでに突風のように走り出している。

「あ…っ、こら、速い！」

シュンも慌ててその後を追った。

フウマとシュンはウオンの元に着いて言葉を失った。

その場にはウオンと他二人、村から出てきている自警団の若者が三人いて、横たわる得たいの知れないものを取り囲んでいた。人間でない事は確かだ。何故なら、背中に大きな翼が生えているからだ。

ゴツゴツした表面で、黒っぽい色をしている。他にも腕の表面や首筋など、服から肌が見えている所にはうっすら透明な鱗らしいものが見える。

「まさか……翼神族よくしんぞくかよ。」

色素の薄い目を丸くしたまま、シユンはおそろおそろ言った。

樹海に住む異形の者にはおぼろ気な、民族の区別があつた。

例えばフウマ達のように、足が速く、いぬがみぞく牙や爪のある異形は犬神族。肌には鱗があり、水に長く潜る者達は魚神族ぎょしんぞくと呼ばれている。

そして、異形の中でも存在が伝説化していた、翼が生えた者は翼神族と呼ばれていた。

何故伝説化していたかと言えば、その姿を実際に見た者はいないし、口から炎を吐くだとか、睨まれると石化するだとか、異形の者ですら化け物に思えるような能力を持っていると伝えられていたからである。

シユンも翼神族など、異形を怖がる人間が想像した者だと思っていた。今からその考えは一掃しなくてはならない。でなければ、目の前のこの物体は何だと呼ばばいいのだ。

「まだ息はしているようですよ。」

ウォルは敬語でフウマに言った。ウォルはフウマが嫌がっても決して敬語をやめない。まだ、ウォルはフウマが村長を継ぐと信じているのだ。

自警団の中ではフウマの次に華奢で背の低い男で、どんな表情をしていても優しく見えてしまうような優男だった。顔とは別に怖いもの知らずな所があつて、他の三人が近付かないのにウォルは興味津々といった様子で翼の生えたその者を近くで眺め回している。

「どうしますかフウマ様。」

ウォルはフウマを自警団のリーダーとして扱う事が多かった。他の団員も特別不満は言っていないのを見ると、黙認しているようだ。年少とは言え、フウマの能力の高さは群を抜く物がある。

フウマは考え込んでいるのか、黙ったままだ。

「息があんなら、一応助け……」

シユンの言葉が途中でぶつりと切れた。言い切る前に、翼が激しく動いてむくりとその人物が起き上がったのだ。

その男はウォルに負けず劣らずの優男だった。気弱そうなその表情は背中のごつい翼と正反対で、何となくチグハグした印象を受ける。瞳は焼けて焦げたような赤銅色で、蒼白な顔をしていた。ひどく疲労しているようだが、怪我はなかった。

取り囲まれているのに驚いて、男は一瞬硬直したが、こちらに敵意のないのを悟ると口を開いた。

「あ、あの、た、助けて、下さい。」

舌がもつれて、ひどくたどたどしい口調で男は続ける。

「この先の、大きな木の幹に、穴があつて、そこにルリ様が…、女の子がいるはずです。どうか、その方を助けて下さい。」

ウォルとシユンは顔を見合わせ、同時にフウマに視線を投げた。

「…何族の者だ。どうして森を彷徨っていた？」

動じた様子もなく事務的な口調でフウマは言った。

明らかにフウマの方が年下なのだが、感情のない口調に気圧されたのか、少しオドオドした様子で男は答えた。

「ぼ、僕自身は翼神族と呼ばれる者…です。一昨日まで、ルリ様のご家族に仕えていましたが……」

そこまで言くと、男は一瞬言葉を忘れたようにうつむいた。

そして、囁くように小さな声で

「人間に襲われました。」

男はそれ以上口を開かなくなった。

それどころか微動だにしないので、ウォルが不審に思って覗き込むと、男はそのままの格好で気を失っていた。

「あれが泣く子も黙る翼神族だよ。何か調子狂うぜ。」  
フウマは何も答えない。

気絶した男はウォルに任せて、フウマとシュンは木の幹にいう、女の子を捜していた。男の言う情報が少なく、いまいち場所が分らない。

「俺はこの辺りの村は行きつくしたと思ってたが、まだまだこの森は広いな。」

樹海の広さは異形の者の関心事の一つだ。森の端から端までを歩き通す、と言って旅に出た者で、帰って来た者はいない。

今の所、この樹海がどこまで続いているか誰も知らないのだ。

「…気を失うまで飛んだんだ。随分遠くからここまで来たんだろう。」

フウマの物言いが、いつもより同情的な気がして、シュンはフウマに目をやった。

自分と重ね合わせてるのかもしれない。

「……女の子早く見つけてやろうぜ。」

シュンが言くと、珍しくフウマは頷いて見せた。

フウマが父親のザンシャと人間に捕らえられたのは六歳の時だった。次にフウマが森に戻ったのは一週間後。瀕死の傷を負って、手にはザンシャの切り落とされた右腕を抱えていた。

それまで、フウマは無邪気に遊びまわる活発な子供で、誰もが次の村長として立派な青年への成長を疑ってなかった。今は村のほとんどの者が腫れ物か何かに触るように、遠巻きから眺めているだけである。フウマはフウマで、笑わず、人と触れ合わず、人との殺し合いに明け暮れる。

サソリはフウマが感情を失ったと思っているが、シュンは違うと思う。

感情をなくしてなどいないのだ。ただ、深い憎しみに焼かれて、他の事に反応できなくなっただけだ。きっと今もフウマの心はあの六歳のまま、時が止まっている。

気付かぬ間にぼんやり立ち尽くしていたらしい。

フウマはすでに背中が小さく見えるほど離れている。

「あ、おい。一人でズンズン行くなよ。つつつか声かけろよ、足止まってるってさあ！」

シユンは慌てて走った。

するとフウマがハタツと止まった。シユンの声に応じて止まったとは考え難いので、シユンは何か見つけたな、と思った。

追いついた先で、フウマの目線に目を落としたシユンが見たのは、木の幹から飛び出している小さな足だった。

直径一メートル位の大木の幹が、ぼっくり窪んで穴になっていた。そこに、黒髪が艶々して美しい華奢な少女が、安らかな表情で眠っていた。伏せた睫毛が長く、幼げだが、とても端正な顔付きをしているのがわかる。

「……いたな。」

「……ああ。」

ここまでさっきの翼神族の男が担ぎ、途中で運ぶのが困難になってここに隠してとにかく集落を探したのだろう。右足が少し穴から出てきていた。その靴の装飾も、衣服もフウマ達には見た事のないものだった。

姫、という格好ではないが、雰囲気はさながら、木に封印された森の姫のようだ。

二人はその光景をしばらく、金縛りにあつたように見つめていた。何か神聖なものすら感じる姿だった。

フウマが長い金縛りに気付いて首を小さく振って、それを解いた。そっと近付いてみる。フウマは自分が息を潜めている事に気がついた。何故だろうと思った。頭の遠い所で何かがムズムズと反応している。フウマは時々感じるこの感覚が嫌いだった。

少女のか細い腕に触れてみる。

氷のように冷たくて一瞬たじろいたが、小さな呼吸音が少女の口元から漏れているのを耳にしてフウマは少しホッとした。

こんなに細いなら骨ばった感触が返ってくるかと思っていたが、実際は驚く程柔らかい。

抱え上げようと思って、肩まで手を回すと、今まで触れた誰よりも細い、小さな体だった。

「……フウマ。何ぼんやりしてんだ？」

「……え？」

シユンの声でフウマは瞬きをした。

「や、え？じゃなくて。」

そのままの格好でしばらくフウマは停止していたらしい。

「そういえば、お前…、同年位の女の子に接するなんて初めてだよなあ？」

シユンはニヤアと気持ちの悪い笑い方をした。何が言いたい、とフウマは思った。

「どーだよ、可愛いお姫様を腕に抱いた気分は？」

さらにニヤニヤしながら肘で頭を小突いてくる。

何を言っているのだコイツは。殺しかねない程の強い目でフウマはシユンを睨み付けた。

シユンは思いのほか強烈な反応が返ってきたのに驚いて、二歩分くらい飛び退った。

「…わ、悪い。」

「……村に戻るぞ。」

持ち上げた。  
軽い。

それに驚いて、また一瞬動きが止まりかけたが、シユンに余計な事を言われるのが嫌で無理に体を動かした。

それでなくても、気分は悪かった。

今まで感じた事がない程、頭の奥がザワザワ悲鳴を上げて、村に戻る間中、フウマはそれを振り払うのに夢中になったのだった。



## 第二話 心の傷

温かい。

閉じた瞼の裏が、こんなに明るい。

日差しが自分に降り注いでいるのだ。

日差し？

という事は、今は昼なのだろうか。

最後の記憶を探ってみる。覚えている最後の場面はクルリの背中。

あの飲み込まれそうな闇夜に不気味な赤光の月が浮かんでいたのを見上げた時から先、記憶がなかった。

クルリ。クルリはどうしたのか。

ルリは目を開けた。

石造りの壁が視界に飛び込む。

少し冷たい風が、フワフワしていた自分の意識を現実世界に固定した。

ルリはがっちりした木製のベッドに寝かされていた。

頭の方に日光の降り注ぐ大きな窓が、足を向けている方に部屋のドアがある。

ルリはゆっくり指を動かしてみた。

かじかんで力が入らなかったのが嘘のように、滑らかに動く。上体を起こしてみる。

動ける。怪我也、病気もなく、動いている。

生き延びたのだ、私は。

その時、部屋の外で話し声が聞こえた。話すというより、一方的に一人が喋っている。

「だから、フウマよお。ふて腐れんなよ。いいじゃねえか、たまには殺し合いなんて物騒な事から離れて暮らしてみろよ。」

楽しげな話し声だ。男の人らしかった。

「じゃあな、フウマ。達者でやれよ。」

部屋に入る前に話しかけていた方の男は、部屋の前で離れていくようだった。

離れて行ったらしい後もしばらく、部屋には誰も入って来なかった。ドアの前で気配が止まっている。

木造りのドアがギツといって開いた。

ルリは少し目を見張った。入ってきたのは、月の光のように見事な銀色の髪の少年だったのだ。

クルリも父も母も黒髪だった。もちろん自分も。それ以外の髪色は見た事がない。

銀髪の少年はうつむき加減で、こちらを見ていなかった。

ルリが目を開けている事も気付いていない。

無表情にも見えるが、ルリには悔しそうな顔に見えた。

「あなたが私を助けてくれたの？」

少年がハッと顔を上げた。

ルリは思わず笑った。

すごい。もしかしてここは見た事もない色の目や髪の人物で溢れているかもしれない。

金色の瞳が、訝しげに笑っているルリを見つめ返した。

フウマは集落に戻ると、思いも寄らない事を命じられた。

拾って来た異民族の世話をしろというのだ。

確かにフウマも、気にならない訳ではなかった。

村の薬師によれば酷い疲労状態ではあるが、それ以外は健康だと言いう事だった。

気にならない訳ではないが、だからと言って、これ以上関わる気はなかったというのに。

だというのに。

いきなり自分に笑顔を向けた少女は、嬉しそうに声を上げてベッドを飛び降りた。

「ねえ、ここは何族の村？すごい！石造りの家なんて初めて見たの

私！」

大きい窓に取り付くとまた、声を上げた。

「岩場ばかり！私が居た所は湖ばかりだったよ。同じ樹海でも雰囲気全然違うのね！」

少女の無邪気な様子に、フウマは言葉に詰まった。

何なのだこの明るさは。

この少女は人間に襲われ、命からがら、ここに来たのではなかったのか。

頭の奥がザワザワした。気分が悪い。

「騒がしくするな。ここは村長の家だ。」

予想以上に自分の声が冷たい気がした。

少女は笑みを消してフウマを見つめている。目が大きかった。真っ黒な瞳だ。

居心地が悪くなって、フウマは目をそらした。

「ごめんなさい。怒らないで。」

「怒ってなんか、いない。」

そんな感情、自分にはないのだ。そう言い掛けてやめた。

確かに、自分は怒っている。

「お前は親を亡くしたはずだ。人間に殺されて。悲しくはないのか。」

自分と似たような目に遭ったはずの少女が、こんなに明るく振舞えるのが、フウマには我慢ならなかった。

もつと、悲しんで、苦しんで、憎むはずだ。自分と同じようになるはずだ。

十年経った今もそんな風に笑えない自分が、弱く感じた。

少女は何も答えない。

フウマは目をそらしたままだったので、少女の表情すら分らない。突然、体に柔らかい何かが触れた。

フウマが驚いて振り返ると、少女が自分に抱き付いていた。

「なっ……！！」

とつさに声を出そうとして、息が続かなくなった。

驚きのあまり息が吸えてなかったのだ。

「よく分からないけど、私はあなたを傷つけたのね。ごめんなさい。」

「

少女はそう囁くと、何事もなかったように、また嬉しそうに笑った。周りの空気ごと引き込むような鮮烈な笑みだった。

フウマは燃えてるんじゃないかと思うほど体が熱いのを感じた。

「そうだ、私お礼を言っただけだった！私の名前はルリです。助けてくれてありがとう！」

そう言っただけで、ルリと名乗った少女はフウマを解放すると部屋を飛び出した。

「ねえ、クルリもこのお家のどこかにいるの？」

廊下でルリが言う。

フウマは半分以上聞いてなかった。

抱き付かれている間、吸えなかった息を補給するのに必死だったからだった。

シユンは開いた口がふさがらず、その様子を眺めていた。

ルリという少女は、楽しそうにあちこちに歩き回っているし、クルリと呼ばれた翼神族の男は、幸せそうに赤銅色の目を細めて笑っている。

はしゃぎ回る二人の後ろで、フウマがトボトボと（シユンにはそう見えた）歩いていた。

もの珍しそうに見つめてくる村の者達の視線に耐えている。彼らが珍しがっているのは、異民族より、村を歩き回るフウマなのだ。実は犬神族の集落で異民族を見るのは、さほど珍しい事でない。

異形の中でも戦闘能力が高い犬神族は、村から村への貿易が盛んな所では、森を通る時の護衛として異民族に雇われたりする。

しかし、フウマが村を歩くのはほとんどない。家にいるか、森にい

るかのだらかなのだ。

隣の部屋で寝かされていたクルリは、夕方近くになって目を覚ました。

傍に元気なルリを見ると泣いて喜んだ。

クルリの翼や鱗は見る影もなく消えうせていた。

ウォルによると、それは一瞬の出来事だったらしい。

運ぶにも、本人の体の二倍ある翼をどう扱ったものか、しかもウォル以外の自警団の連中は怖がって近付こうともしないのだ。

とにかく、道を確保しようと、長い草を踏みなしたり、運ぶ時引っかかりそうな枝を切ったりして戻ってくると、翼も鱗もなくなっていたという。

こうなるとクルリは、ほとんど普通の人間のようなだった。

普通の人間と言えば、ルリもそうだった。

犬神族はみな、爪や牙が長く鋭い。走る速さや跳躍力が普通の人間の何倍もあるといった特徴がある。ルリは民族的な特徴が何もなく、見た目では何族か特定できなかった。

「村を見学してきたのか？」

「あ、はい！…えと…」

「シユンだ。村長直属の護衛をしている。よろしくな。」

ルリはニコツと微笑んだ。幼げだが、魅力的な笑みだった。

「私はルリです。こっちはクルリ。お世話になってます。」

「その事なんだが、今から村長が二人に会いたいと言ってる。大丈夫か？」

「はい！もちろんです。」

ルリとクルリが村長の家に駆けていくのを見届けて、シユンは問題のフウマを振り返った。

顔が何となく疲れている。

「ど、どうした、お前…。」

「俺はあの女、嫌いだ。」

「……はあ？」

フウマが好き嫌いの話をするのは珍しい。

「あの女って、ルリちゃんかよ？」

名前を聞くのも嫌、というようにフウマは顔をしかめた。  
シュン呆気に取りられてそんなフウマの様子を眺めている。

「俺は、もう自警団に戻らせてもらう。村長の命令でも無理だ。」

「え……っ、おい待てよ！」

フウマは風のように駆け去っている。

シュンは反論する暇もなく、遠ざかる背中をポカンと見ているしかなかった。

「フウマ様、村にいらして良かったのに。」

ウォルは眉を八の字にして言った。

彼はさつきから、フウマの顔を見ればそればかり言っている。

フウマもその度に無言になるので、会話が何も進まない。

樹海の夜は、周りが黒いと言って良いほど暗かった。

夜目が良い彼等は、そんな暗さでも松明一つ灯さずにいる。

「俺がここにいちゃ、悪いのか。」

フウマが初めて、言葉を返した。

「そんな事ないですけど…、だってフウマ様はあの翼神族と女の子の事、任されたんでしょ？シュンさんが、だからフウマはしばらく自警には加わらないって言ってました。」

軽い舌打ちが聞こえてきた。

さすがにこの闇では表情の機微までは分らないが、明るみで見れば、憎々しげなフウマの表情が見れただろう。

「シュンさんはフウマ様を自警に加えるのに反対なんですよ。戦とはいえ殺し合いは、心の何か柔らかい所を削ってしまうから。」

フウマはウォルを見た。

フウマには、表情が見えているかもしれないとウォルは思った。

夜目の効き具合も、フウマに敵う者はいない。

ウォルも自警に入って二年経つ。人間は何人も殺した。それでも、初めて殺した時の事は未だに覚えている。

「あの女、俺がどれだけ人を殺しているか知ったら、どんな顔をするだろうな……。」

囁くような声だったが、森の静けさと犬神族の聴覚の良さが手伝って、ウォルの耳にフウマの独り言はしっかり届いた。

「……あの女って誰です？」

「だからル……」

言うつもりもなかったのに、口から出てしまったのだろう。闇の中でフウマは大いに慌てたようだった。

ウォルには、フウマの慌てように首を傾げるばかりである。

「ル……なんですか？」

「何でもない……！」

フウマの大声に、木に留まっていたらしい鳥が驚いて飛び去った。

ウォルも腰を抜かすほど驚いている。

しかし、一番驚いているのは大声を出した本人らしい。口元を手で覆っている。

「あ、ああー、あのもしかして、あの女って、異民族の……」

先にクルリを担いで村に帰っていたウォルがその少女を見たのは、薬師を呼んで戻ってきた時に一瞬ベッドに寝かされていたのを見たのみである。

そのあとすぐ、自警に森へ戻ってしまったのだ。

「その方にどう思われているのか、気になるんですか？」

「なっ……！？何でそうなる……！」

「だって、自分でそう仰いましたよ。どうこう言ったら、あの女どんな顔するかって、ボソボソと。」

フウマは戸惑って言葉を失ったようだ。

ウォルは思わず笑った。

こんなに率直なフウマの感情に触れたのは久しぶりだ。

「……俺は、あの女が嫌いだ。だから……。」

「……気になった？」

「……。」

フウマの殺気を感じ、ウォルは即行で「ごめんなさい。」と言った。これ以上こたわると、本当にやられかねない。

フウマはまだイライラしているようで、居たたまれなくなったウォルはフウマから顔を背けた。

その時、ウォルの顔色が変わった。

フウマがその異変に気付いて、素早くウォルの視線を追う。表情が凍る。

村の方向。

煙。

ザツと血の気が引く。頭の中が真っ白になる。

一つだけ鮮やかに思い浮かんだ。

人間の襲撃。

言葉もなく二人は駆け出していた。

いつもより息が上がるのが早い体を、フウマは他人の物のように感じていた。

二人が村に辿り着いた時には、襲撃は止んでいた。

目に映るのは、炎よりも崩れた石積みが目立った。

石造りの家の壁に大きな穴が、あちこちあいている。

炎が上っている家もあるが、大して激しい燃え方ではなくなっていた。

ウォルが消火に当たっている者の一人を捕まえてきた。

「何があった？」

「わからねえ。急にドカンドカン音がしたんで外に出たら、黒くてでかい鉄の玉が飛んで来ていやがった。下敷きになった間抜けはいないが、壁を壊されてこのザマだ。」

どうやらこの男の把握する限りでは、死人も怪我人も出てないよう



だ。

「手伝おう。」

ウォルが消火の作業に加わろうとすると、男は少し首を振って、フウマに向き直った。

「ここはいい。それより、さっき村長の家から火が上ってたみたいなんだ。」

「村長の家が!？」

フウマは最後まで聞かず、走り出した。

はじめに母の顔が浮かんだ。

そして、あの異民族の黒髪が頭をかすめた。

村長の家は、炎は消されていたが、もうもつと黒煙が立ち昇っている。

サソリは家の前に立っていた。

サソリもフウマの顔を見つけ、少し泣きそうな顔になった。

「フウマ! 無事だったの。」

「村の襲撃を許すとは、面目も在りません。」

フウマが頭を下げて、再び上げた時には、サソリは村長の顔に戻っていた。

「いいや。それよりフウマ、ルリを見なかったか？」

フウマの動きが一瞬止まった。

「今、クルリとシュンが探し回っているが、どこにも姿が見えないんだよ。少しの間だけど火が上ったから、家の外に出たと思うが

……。」

「探します。」

フウマは迷う事なく黒煙の上る家に踏み込んだ。

後ろでサソリが何か叫んでいたが、構わなかった。

外にはいない、という確信があった。

もしいたら、一番に自分が見つけているはずなのだ。

フウマは村に着いた時から、自分の目が、あの闇より黒い漆黒の髪を探す事を止められなかった。

何故かは分からない。

そんな事を考えるのは後で良い。

ただ今は、あの黒髪を目の届く所に入れて、この頭のイラつきを静めたかった。

家の中は、黒煙ですぐ傍の自分の手すら見えない。

フウマは舌打ちを打った。

これでは目が良くて悪くても一緒だ。

人間の何百倍ある嗅覚も、今は焦げた木や布の臭いばかり鼻について、邪魔に感じるほどだ。

「おい。」

フウマは手探りで進んでいく。

これまで生きてきた中で最大に五感を研ぎ澄ませる。

空気の動き、息遣い。

フウマは微かなその気配だけを頼りに進む。

「……おい！」

名は意地でも呼びたくなかった。親しみたくなかったからだ。部屋の入り口らしい所に行き当たった。

ここだ、とフウマは思った。

位置的に村長の部屋だろう。

「そこにいるんだろ？返事をしろ！」

気配があるのに返事がない。

焦りがフウマの胸をふさいで行く。

不意に、色んな意地がどうでも良くなった。

「返事をしろ、ルリ！」

闇雲に部屋を突き進むと、淀んでいた空気が動いて、黒煙が希薄になった。

黒髪の少女がうずくまっているのがはっきり見えた。

「ルリ！」

フウマはルリの細い腕を掴んで引き上げた。そして、ハッと息を呑む。

ルリは泣いていたのだ。

フウマの存在に今気付いたように、ルリは目を見開いている。

「あ、あはは。フウマさんだ。あ、名前、聞いたんですよ村長様に。フウマさん、名乗ってくれないから……。」

すす汚れた顔をクシャクシャにして、ルリは笑った。そんな顔も魅力的に見えた。

「名前なんかいい。何をこんな所でうずくまってる。早く外に……」  
「ダメ！」

強い調子でルリは叫んだ。

「待たなきゃ……！待たなきゃダメ……！」  
「待つって何を……！」

フウマも強く聞き返そうとして、ピンときてしまった。すぐピンと来たのは、同じような傷をフウマも持っているからかもしれない。

ルリが待っているのは、父親と母親だ。

「……お前の家も、こうやって襲われたんだな？」

ルリはぼんやりフウマを見返す。何の光もない黒い目。

「家が燃えて、お前は親に家から逃がされたんだな……？」

ルリは今、黒煙を見て、その時の記憶が蘇ったのだ。連れて逃げようとするクルリに、ルリは何度も言ったのだろう。

お母さんとお父さんを待たなきゃ、と。

フウマは腕を持つ力を強めた。

「ルリ。」

ルリの大きな目がゆらつと動いた。

もうその目には光が戻ってきていた。

ゆっくり微笑む。

「外に、行こう……。クルリにまた心配掛けちゃう。」  
フウマは頷いた。

その時の自分の表情に違和感を感じて、フウマは頬に手を当てた。  
間違いない。  
自分は今、微笑んだのだ。

### 第三話 出兵

石を叩く、かん高い音が聞こえている。

叩く所が芯を捉えていれば、石でもこんなに澄んだ音を出す。

フウマは軽く汗を拭った。

朝から石を積んで叩く事の繰り返しだ。

今朝、自警に向かうウォルを見送ってから、ずっとこの作業に掛かり付けである。

壊された石積みは、かなり多かった。

フウマは再び石を打ち込もうとして槌を振り上げたが、近付いてくる気配に顔を上げた。

よく焼いた鳥肉の香りがする。

昼食を運んできたらしい黒髪の少女は、フウマを見て微笑んだ。

フウマは、表情を変えずに、しかし、ゆっくりと槌を置いた。

「…さてと。」

サソリは気を取り直して玉座に座りなおした。

あれだけの黒煙が上っていた家の中だったが、予想外に無事な家具が多かった。

玉座も焦げてはいるが、座れないほどではない。

サソリが最も喜んだのは、獅子の絵のつい立が丸々無事だったことである。

すすを払うと、銀色の美しい毛並みを持つ獅子は、以前と変わらなように玉座の後ろで堂々とした佇まいを醸している。

目の前にはクルリが正座して、こつちを見上げていた。

「クルリ。お前は昨夜の襲撃に使われた武器を知ってるって?」

いかにも気弱そうな仕草の割りに、クルリの赤銅色の目はよく見るとまるで奥に炎が燃え上がっているようで、不敵だ。

外見は二十代後半といった所だが、ルリの両親に仕えていたというから、もつと年はいつているのかも知れない。

「は、はい。多分あれは、大砲と呼ばれる物だと思います。」

「たいほう？」

クルリは弱々しげに頷いた。

ルリ以外の者に接すると、いつもこの態度だ。人見知りが激しいのだろうか。

「鉄の弾丸を打ち出します。威力は矢の何倍もあつて、他に鉄砲という物もあります。」

「てつぽうつてのは、どんなのだ？」

「大砲をもつと小さくして、弾丸の飛ぶ速度を上げたようなものです。至近距離で撃たれたら、鉄の鎧も貫きます。」

サソリには、鉄の鎧の耐久度がそもそも分からなかったが、堅い物の例として引き合いに出したのだろう。

この樹海に鉄という鉱物は存在しない。人間の武器は鉄で作られているという認識があるだけである。

「……クルリ、あなたは何故そんな情報を知っていたんだ？」

つい立から突然、シユンが口を挟んだ。

シユンはフウマが森に出ない時は、常につい立の裏に張り付いて待機している。

サソリはそれでフウマが今日、自警に出ていない事を知ったのだ。

クルリは、どう答えるか迷った風に目を瞬かせていたが、やがて訥々と呟いた。

「……もう、亡くなりましたが、私を育ててくれた祖父が、教えてくださいました。大昔の人間が使っていた武器は、もつと、複雑で殺傷力の高いものだったのですよ。」

シユンもサソリも、顔を見合わせた。

「大昔つて……あんたのじいさんだろ？どの位昔だ？」

「……翼神族の寿命は長いのです。とてつもなく、長い。私は、人間の進化と退化の繰り返しをずっと記憶しているのです。」

伝説の一族、翼神族。

クルリの言葉に、何か言い知れないものを感じて、シュンも質問を続けられなかった。

サソリにはもう一つ、気になることがあった。

「クルリ、どうにも解せなかった事が一つあるんだが。」

「はい。」

「犬神族が人間の襲撃に気が付かなかった事など、この長い戦の歴史でも一度もありはしないんだが、今度の襲撃は石積みが壊れる音がするまで誰も気が付かなかった。」

犬神族は嗅覚と聴覚に特化した一族である。

人間の臭い、足音、金属の擦れ合う音。気付く要素は幾らでもあったはずだった。

「それは…私にも分かりかねますが…。」

クルリは萎縮してうつむいた。

人間が気付かれず森に侵入する技を手に入れたのだとすれば、新しい武器よりもずっと一大事だ。

「……近いうち、大きな戦になるかもしれないな。」

サソリは苦々しい顔で呟いた。

「……。」

クルリは不安げにうつむいて、何も答えなかった。

肉に食らいついていると、周りでフウマと同じように石積みの修復をしていた男達が、好奇の目でこちらを見守っているのが見えた。どこか、もっと離れた所で座ればよかったとフウマは思った。

いやしかし、離れていれば、それはそれで好き勝手に噂の種にされただろう。

「おいしい?」

周りの視線も構うことなく、ルリが聞いてくる。

相変わらず無邪気で、何の屈託もない笑顔を見せているが、もうこの笑顔がフウマをイラだたせる事はなかった。

ルリの心の傷を見てしまったからだろうか。

昨夜のルリを思い出すと、苛立つのとはまた別の感覚で、少し頭がうずいた。

「ねえ、フウマさんってば。」

フウマがいつまで経っても答えないので、ルリがもう一度言う。

「…さん付けはやめろ。」

フウマは肉の感想の代わりにそう言った。

シュンが、ルリはフウマと同じ十六歳だと言っていたのを思い出したのだ。

ルリは頷いて笑った。

「じゃあ、私の事も呼び捨てで…ってフウマは初めて呼んでくれた時から呼び捨てだったか。」

「…っ！」

フウマは思わず、息を詰まらせた。

昨夜は夢中で気付いていなかったが、自分がルリの名を必死で呼びまわっていたのを聞かれたと思うと、無性に恥かしくなった。

一方ルリは、言われずとも慣れたらさん付けをやめるつもりだったのか、すでに違和感なく呼んでいる。

さつきから一度も目を合わせないフウマの顔を覗き込む。

覗き込むルリを避けるように、さらにフウマは顔を背ける。

「…フウマはもしかして、照れ屋さんね？」

「…はあ！？別に照れてなんか…っ」

弾かれたように顔を上げる。

フウマは一瞬ルリと顔をあわせたが、気まずそうにすぐまた背けた。ルリはそんな様子のフウマを見て、変なの、と声を上げて笑った。

凄まじく不機嫌なフウマを見て、シュンは一瞬、声を掛けるか躊躇



した。

フウマは、自室に引つ込もうという所だった。広い村長の家の中でも、一番小さく玄関に近い部屋がフウマの部屋だ。

寝るためのベッドと着替えを置く小さな棚の二つしか物はなく、実際寝るのと着替える事にしか使われていない。

「こ、今度はどうしたお前……？」

フウマは少し目を上げてシュンを見、また不機嫌そうに宙を睨んだ。

「……俺は、あの女が嫌いだ！」

「……それ聞くの二回目だけど。」

しかも一回目より言い方に力がこもっている。

「噂のルリちゃんは？」

「……まだ石壁の所にいるだろ。」

「置いてきたんか。」

刺さるという表現がぴったりの目線で、フウマはシュンを睨み付けた。

シュンは思わず引きつった笑いを浮かべる。

「何で俺がいちいちあいつを連れて帰らなきゃならない？！」

「え、いやー、ほら……、何かルリちゃんフウマに懐いてるじゃんか。」

一瞬、フウマの表情が固まった。

「おや？」とシュンは思った。

「……バカにしているの間違いだろう。……そうだ、あの女、完全に俺をからかってる。」

最後の方は独り言らしい。ブツブツと呟きながら、しかしフウマは手持ち無沙汰なのか、やはりルリを迎えに行くの気なのか、玄関の方に歩き出した。

「お、おい、フウマ……。」

シュンが追いかけて行こうとすると、突如、玄関口が騒がしくなった。

数人が何か言い争っているようだ。

一人は村長の家に何人かいる従者の者で、もう一人は聴覚のいい犬神族には耳障りなほどの大声の持ち主だった。

「失礼するぞ、サソリ殿！」

地鳴りのような腹に響く低い声と共に、大男がかがみ込むように家へ入ってきた。

「じゅうしんぞくあや獣神族長ガブ殿！」

大男を見たシユンが声を上げた。

ガブはシユンとフウマに軽く目礼し、のっしのっしと玉座の部屋に歩いて行った。

ガブは床にドシンと座り込むと、挑戦的な目線でサソリを見上げた。年は四十辺りだったはずだが、腕や脚の筋肉は丸太のように太く、日に焼けた赤い顔をしている。この薄暗い森でこんなに日焼けをするのは、彼等、獣神族が好んで岩場に住んでいるからだ。体は普通の人間より二周り程も大きく、鈍重だが、非常な怪力を持つ一族である。

しかし彼等の最大の特徴は、肉体的なものよりも、精神的な所にあるとサソリは思っている。

飽くなき闘争心。

とにかく好戦的なのだ。

「聞いたぞ。昨夜人間の襲撃で、大きな被害があったと。」

森の入り口に村がある犬神族は、各一族へ人間の情報を伝令する事が義務付けられている。

昔々の一族会議で決まった事だが、この会議で決まった事は逆らえない。

「…大きな被害と言っても、死人は一人も出していない。」

「そこだ、サソリ殿。貴君の甘い所は。」

ガブは蓄えられた立派な顎鬚を撫でた。

「死人が出なければいいという問題ではない。報復攻撃を行うべき

だ。獸神族からも戦士を合流させよう。なんなら、わし等だけでもいい。人間に身の程を知らせてくれる！」

クルリはガブから逃げるように端に移動している。シユンとフウマも開け放たれたままの扉から、中の様子を見ていた。いつもなら、この剣幕を押さえるのに四苦八苦する所だが、今回は確かに攻撃を行うべきかもしれないとサソリは思った。

「確かにここで攻撃しないと人間に勢いづかれるかもしれない。新しい武器も実際ぶつかってみなければ対策の立てようがない。」

サソリは自分に納得させるように頷いた。

「決まりだ、ガブ殿。犬神族は報復攻撃を行う。獸神族の援助、痛み入る。」

ガブは満足気に笑った。

「そう言ってくれると信じていたぞ。村のすぐ近くまで、三百名の戦士を連れて来た。」

すでに三百名も。

もしサソリが断っても、その三百名で襲撃をするつもりだったに違いない。

早い方が効果的だろう。

戦士の編成を今夜にも始めようと、サソリは思った。

村長の家の二階からは、村の全体が見渡せる。

ルリとクルリは、最初に寝かされていた二階の部屋をそのままあてがわれていた。

客が来る機会が多いのだろう。客間として空室になっている部屋はまだまだ沢山ある。

夕方になると、村長の家の前には屈強な体つきの若者が続々と集まってきた。

報復攻撃が始まるのだという。

ルリの暮らした地では、農耕が盛んで、収穫期は実りに感謝し、種

植えの時期には豊作を祈り、

村の中で子が生まれれば、幸多き人生を神に祈願し、新しく結ばれた夫婦があれば、切れることのない愛を誓い合わせた。

そこでは人間も異形もなく、戦などお伽話のように思っていたものだ。

あの夜、ルリの村が襲撃を受けたことは、まさに想像もつかない事だった。

「ルリ様、私もようやくこの村の事がわかってきました。ここは人間との戦の最前線なのですな。」

クルリの顔は暗かった。

危険な地にルリを運んでしまったという自責の念に駆られているのだろう。

「これからこの村の人たちは人間の里に攻め入るの？」

獣神族との対談の様子を聞いたルリはそう尋ねた。

クルリは頷く。

やはり、お伽話のように感じられた。

「彼等は何故戦うの、クルリ。」

「……。」

クルリは答えない。

どう答えても、ルリの満足できる回答はないと思った。

「私には、わからないよ。」

人間と異形の何が違うのだろう。

力に差があるうと、姿が違かろうと、同じように子を成し、生活するのに。

戦に、何の意味があるのだろうか。

お伽話に思えるほどの知識では、何もわからない、とルリは思った。

「ねえ、クルリ。」

クルリは顔を上げてルリを見た。

陽炎を封じ込めたような赤銅色の瞳にルリの黒髪が映る。

「私も参加できないかなあ。戦。」

クルリは息が止まったような顔をした。  
日が落ちていく。  
じきに、兵の編成が始まるだろう。

真っ暗な夜だった。

新月だ。

その濃い闇を松明で照らし、編成は行われていた。

大規模な編成を行うのは村長になって初めてのことだった。

サソリは少し緊張して、玉座に座っていた。

百名連れて行く。

志願してきた戦士の一人一人を見て選ぶのだ。

先頭を犬神族が進み、後ろから獣神族がついて来る形を取る。

前の犬神族は、人間の統制を崩し、攪乱する。

浮き足立った人間を後ろからやって来た獣神族が踏み潰すのだ。

なるべく身が軽い、足の速いものを選抜しようとサソリは思った。

隣でシュンが緊張感なく、くわあとあくびを漏らしている。

シュンとフウマは戦場で直接百名を指揮する者として、編成に組み入れられていた。

二人してサソリのすぐ後ろに控えて編成に立ち会っている。

「あいよ、次の奴いらっしゃい。」

「……おい、シュン。もう少し緊張感を持って取次ぎの役をしてくれないか。」

面接を終えた者と扉の外で順番を待っている者を入れ替える役はシュンがやっている。

「村長、誰も彼も緊張してたら、間が持たないぜ。いーのいーの、俺くらいが一番。」

サソリはフツと口元に笑みを浮かべた。

確かにその通りだろう。

シュンのようなタイプが戦場では一番強いのだ。

シユンが扉を開け、次の者を呼び込もうとして、素っ頓狂な声を上げた。

「えっ！？何してんのルリちゃん！」

ルリという言葉に、今まで人形のように動かなかったフウマが目をむいた。

立ち尽くしているシユンの横をヒョイとすり抜けて、小さい人影が部屋に滑り込んできた。

「こーんばんわー！」

元気一杯にルリは挨拶した。その朗らかな声とは裏腹に、場が凍りつく。

そつと、その後ろから、クルリのヒョロリとした細い体躯がルリを追いかけて部屋に入ってきた。

サソリが呆気に取られて、口を開こうとすると、それよりも先にフウマが噛み付くように叫んだ。

「何しに来た。村長は兵の編成で忙しいんだ、くだらない用なら放り出す！」

サソリはフウマの剣幕にも呆気に取られて、両者を交互に眺めた。悪びれもせずルリは笑う。

「まあまあ、そう怒らないでよ、照れ屋さんのフウマ。」

「おっ…、お前、まだ言うか！」

顔を真っ赤にして叫ぶ。

本人は気付いていないが、その反応は照れ屋そのものだ。

「いや、でもルリちゃん、マジでダメだって。今晚中に編成終わらせて、明日の早朝には出兵すんだからさ。」

シユンが扉を開けたまま言う。

ルリはシユンに微笑み、サソリへ顔を向けた。

「サソリ様。どうか、私達も連れて行ってください。それを、頼みにまいました。」

ぺこりと頭を下げる。

犬神族の三人はほぼ同時に言った。

「はああああ？」

予想外とはこの事だろう。

ルリが兵に志願してきたのもそうだが、さらに予想しなかったのは、ルリの戦闘能力の高さである。ルリには爪も牙もないが、代わりに透明な刃がついた短剣を踊るような動きで使う。

「それなりに戦えるのはわかった。だが、兵として扱えるレベルじゃない。」

サソリは言った。

「わかってます。でも、兵としてではなく、兵糧の番でも、雑用係でも、やる事一杯ありますよね？」

確かにそうだった。

野営での料理を作る者、薬師など、戦わない者も数人、従軍させるつもりだった。

「お前がそうまでして報復に加わりたいのは、人間への恨みを晴らすためか？」

サソリの問いに、フウマの金色の瞳が揺れた。

ルリは目を丸くしてサソリを見返した。

思ってもみなかったという風だ。

「私、人間を恨んだことありませんよ？」

サソリが口を開く前に、またしてもフウマが先にルリに突っかった。

「嘘だ！じゃあ、何故従軍を望む？親を殺されたからだろうか！」「必要以上に声を荒上げる。」

透き通った漆黒の瞳が、フウマを見つめた。

フウマは気まずい気持ちになって、目を伏せた。

この目には何故か敵意が挫けるのだ。

「フウマは人間を憎んでいるの。」

そうだ、当たり前だ。フウマはそう叫びたかったが、うまく口が動

かなかった。

「それに、憎む事が良くない事だとも思っているのね。」

今度はサソリが目を丸くてルリを見返す番だった。

「思っていない。人間は敵だ。敵を憎んで何が悪い？俺は今まで何人も、憎むまま人間を殺してきた！」

フウマが低い声で言う。

目を上げると、ルリが悲しそうに眉を寄せているのが見えた。

初めて見る表情だった。

昨夜、泣いていた時でさえ、笑い泣きだったのだ。

何か自嘲的な笑みが顔に浮かびそうになる。

同情されているのか、俺は。

急激に、頭が悲鳴を上げるほどザワザワと疼いた。

この女に同情されるのは耐えられない。

「お、おいフウマ！」

フウマは玉座の間から走り出していた。

廊下に並んでいた兵が、一瞬ざわついたが、すぐに沈黙が降って来た。

ルリは少し慌てて、フウマを追うか迷ったように、サソリと、フウマが出て行った方向とに視線を彷徨わせている。

「追ってくれ、ルリ。」

サソリが言った。

ルリはすぐ頷くと、

「余計な事を言っでごめんなさい！従軍はやっぱり諦め……」

「いや。」

ルリの言葉を遮る。

「ついて来てくれないか、ルリ。」

ルリは一瞬、逡巡したようだ。

フウマとこんな風に確執があつては、戦いに差し支えるのでは思つたのだ。

しかし、それは少しの間で、ルリは深く頷いた。



サツと踵を返す。

「この闇じゃ、もつどこ行つたか、わかんねえぞ。俺が匂いを辿つてやるよ。」

シュンがルリの前を先行して走り出て行つた。

また、沈黙が降りる。

部屋にはクルリとサソリだけが残つた。

「従軍を許した私を憎むか、クルリ。」

クルリは弱々しく首を横に振つた。

「感謝いたします。ルリ様の希望を通してくださつて。」

慣れている、というような反応だ。

ルリの無茶は今に始まつた事ではないのかもしれない。

サソリは目を細めた。

私はフウマの事を、何も理解していなかったのではないか。ふとそう思う。

憎しみの奥にフウマが何を思っているかなど、サソリは考えた事もなかった。

自分には、あんな風にフウマの感情を揺さぶる事は出来ない。

「気になさる事は、何も在りません。」

サソリはハツとしてクルリを見た。

「サソリ様は十分、フウマ様に母親として認められております。ただ、今のフウマ様に必要なのは母であるサソリ様の言葉でなく、同じ境遇のルリ様の言葉だったというだけなのです。」

二十代後半の外見の青年は、笑うと、年月の重みのような深さを感じさせた。

そのせいか、サソリはその言葉に素直に頷く事が出来た。

「今夜中に編成を終わらせなくてはならないのでしょうか？私が取次ぎ役をしましょうか。」

「頼む。」

次の兵がクルリに通されて部屋に入ってくる。

今は村長として編成に集中しようとサソリは思った。

冷たい石の感触が肌に触れると、ようやく頭の疼きが治まった。  
新月の夜。

人間の襲撃に備え、松明も燃やさない村は、頭で想像する闇より、  
もっと濃い黒で覆われている。

昼間、自分で積んだ石壁にもたれると、フウマはぼんやり空を見た。  
驚く程、気持ちが落ち着いて、フウマは気がついた。

自分はこういう闇が嫌いじゃない。

ルリの黒髪のような闇より黒い色。

「フウマ。」

目の端に松明の炎と、それに照らされるルリの顔が見えた。

この闇で嗅覚も夜目も利かないルリが一人で来れる訳がない。どこ  
かにシュンもいるのだらう。

少しずつまた、頭が疼くのをフウマはじっと耐えた。

「私は二回も命を助けてもらったのに、私は同じ回数、あなたを傷  
つけてる。ごめんなさ…」

「謝るな。」

フウマはルリの言葉を力なく遮った。力加減を変えたとすぐ怒声に  
変わりそうだったからだ。

「余計、惨めな気分になる。」

「…惨め？」

ルリはフウマの向かい側に積まれた石の上に腰掛けた。

「何故、惨めになるの。」

フウマは答えないうもりでいた。

しかし、口が勝手にしゃべりだしていた。

「お前が、俺と違うから。」

何を言い出しているのか自分でもわからなかったが、止まらない。

「俺は、気絶したお前を見つけた時、俺と同じだと思った。昔、俺  
も人間に親を殺され、命からがら逃げて来た。だから、同じだと。」

ルリは真剣な眼差しでじつと耳を澄ましている。

「でも、お前は俺とは全然違う。それが、俺を惨めにする。」

「何故、それが惨めなの？」

フウマは力を入れて口を閉じようとした。しかし、どこにも力が入らず、ただ頭が痛くなっただけだった。

「お前の行動全部が。お前が泣いても、怒っても、惨めだ。」

フウマは笑いたくなくなった。随分、酷いことを言っている。

他人が言った言葉のように、それがわかる。

「お前が笑うから。お前が人間を憎まないから。俺は惨めだ。」

視界が歪んでいるのに、フウマは初めて気がついた。

「俺には、それが出来ないから、苦しくて惨めだ。」

頬に指が触れた感触があった。

細くて小さな指はそっと涙をなぞって、背中に回された。

力が入らない。

ルリに抱きしめられて、自分が石のように冷たくなっていたのがわかった。

「でも、フウマ。昔は知らないけれど、少なくとも今」

ルリの声が耳のすぐ近くに聞こえている。

「あなたは怒るし。そうよ、私まだここに来て少ししか経ってないのに、何度あなたを怒らせたことか。」

クスクス笑う声がする。声以前に体の振動で笑っているのがわかる。

「それに、泣いてるわフウマ。ちゃんと出来てる。」

「でも俺は、これから人間を憎み続ける。人間を殺す事で喜ぶ俺を、お前は」

軽蔑するだろう。

そこまで言いかけて、フウマは惨めだと思っ理由をようやく、完全に理解した。

俺は、そういう自分を今まで、心底軽蔑していたのだ。

ルリのように生きたかった。何でも良いことで笑い、素直に泣いて憎むことを知らない。

そういう風に生きたかった。

だからこの少女を嫌い、顔を背け、それでも惹かれていたのだ。

「私がフウマを軽蔑するわけ、ないじゃない。今までも、これからも。」

「でも」

「フウマは私が人間を殺したら軽蔑する？」

ルリが人を殺すなど、想像できなかったが、それでもフウマは軽蔑しない、と思った。

殺しじゃなくとも、他のどんな事でも、ルリに対して軽蔑する気は起きないと思った。

何をして、それはルリなのだ。

「フウマはフウマなもの。これからずっと、フウマがフウマだって事は変わらないもの。」

「……よくわからない。」

フウマは目を閉じた。

「でも、それを聞けて、良かった気がする。」

頭の中が、今までで一番晴れている。

石のようだった体は、すっかり温まって、腕に力が入るようになったが、フウマはルリを振りほどかなかった。

## 第四話 敗戦

サソリは信じられない気持ちでその光景を見ていた。

次々に倒れていくのは、自分で選抜した兵達だ。

どうしてこんな事になった？

サソリは深い沼に引きずり込まれるような脱力感に陥って行った。  
完全な敗北だった。

村を出て三日で森を抜けた。

犬神族の足であればもつと早く着いたはずなのだが、獣神族に合わせるの進軍ではこれが精一杯だった。

森を抜けるとすぐに、赤茶の乾いた荒野が広がっている。

兵の多くはそれに大きな衝撃を受けたようだった。

この広々とした乾いた大地は、昔は森の一部だが、戦争の最中、人間に徹底的に焼き払われたのである。

未だに木の芽一つ出ない、不毛の地となってしまった哀れな地帯なのだ。

今夜の野営が攻める前の最後のキャンプになりそうだった。

ここから先に進むのは兵のみで、軍医や兵糧を守る者達はここで兵の帰還を待つ事になる。

医師の診察用に立てられたテント内で、薬師として従軍したガランはゆっくりと、薬草を配合する作業をしていた。

真っ白な白髪をワシャワシャとかき混ぜるようにかく。手ではなく、尻尾で。

ガランは袁神族だった。

袁神族は身体的には手足が長いのと、尻尾が生えているのが特徴である。犬神族より戦闘力は劣るが、爪や牙は鋭い。顔の肌が赤く長く駆ける才はないが、身のこなしの良さは犬神族と同等かそれ以

上だ。

手先の器用な者が多いので、服や装飾品を作って売るなど、森の物流を担っている一族である。

ガランが犬神族の村に来る事になったのは、当時の村長と親しかった薬師の父が一家ともども引き連れて犬神族の村に移り住んだのがきっかけだった。

父も母も故郷へ帰ることなく犬神族の地に還った。自分もそろそろ両親と同じ命運を辿るだろう、とガランはこの白髪頭を見ると思う。ガランはこの従軍はもっと忙しくなると思っていたが、優秀な助手の参入で、心配していたほどではなかった。

その助手とは、まだ村長の息子と同年だという、何故従軍を許されたのかよく分からないが、ルリという黒髪の美しい少女だった。薬草を潰して一日中煮詰めたり、擦っては乾燥させ、練っては煎っては、と地道に時間のかかる事ばかり、文句どころか、常に笑顔でそれをやっている。

しかもそういう作業に慣れているようだ。ガランが薬師の経験があるのか、と聞くと、父親が薬師のような事をしていて、手伝いをよくしていたのだという。

何でも、元いた村は人間に焼き滅ぼされて、はるばる犬神族の村に逃げ延びたのだそうだ。

あまりに屈託もなくその話をするルリに、ガランは最初冗談かと思ったほどだったが、村長付きの護衛シユンから聞けば真実であるらしい。

「ガラン先生、この薬、ドリアムさんのですか？」

「ああ、うん。」

ガランは苦笑した。またドリアムが来ているか。

この獣神族にしては体格の小さめなドリアムという青年は、余程ここが気に入ったのか野営の間中このテントに遊びに来ている。

「はい、ドリアムさん。」

丸い顔をクシャッとさらに丸めるように笑ったドリアムは、ガラン

とルリに丁寧にお辞儀した。

「ありがとう。この薬ほんとよく効くよ。俺は緊張するともう、絶対に眠れなくて寝不足になるけど、今回は薬のおかげでぐっすり眠れてる。」

患者は大体若い戦士で、症状はみな、緊張による不眠や腹下しだった。

ただでさえ今回進軍する兵は初陣である者ばかりなのだ。

薬をもらいに来る者は多かった。

「薬を飲みすぎるなよ。動きが鈍るからな。もうそろそろ隔絶の壁が近い。」

ガランは長い尻尾で遠くにあった薬草を引き寄せて、混ぜ合わせていた薬に加えながら言った。

「隔絶の壁？」

ルリとドリアムが同時に聞いた。

「…なんだ、この呼び名を知らないか。二人はまだ若いものな。…このまま真っ直ぐ進めば、人間が森に対する防衛線として築いた、背の高い石の壁が見えて来るんだよ。そこを、わしのような老人は隔絶の壁と呼んだりする。もう何百年と崩されてない、人間と異形の世界を隔絶する壁なのだよ。」

もつと戦火が激しく燃え盛っていた時代は、そこを巡って毎日何百人と死んでいたという。

隔絶の壁は厚く、異形の力を持つてしても崩れる事がなかった。

ドリアムは少し身震いしたようだった。

「ドリアム、お前は獣神族にしては随分大人しい性格なのだ。わしはてつきりガブのような奴ばかりかと思ってたぞ。」

笑ってガランは獣神族長ガブの怒った時の凄まじい形相を真似してみせた。

しかし、ドリアムは笑うどころか元氣なくうつむいた。

獣神族にしては小柄といっても、ガランやルリに比べれば二周りくらい大きい体が、少し縮まったようだ。

「そうだ。俺は臆病者なんだ。皆にもそういつて馬鹿にされる。」

「いや…、そんなつもりで言ったんじゃないんだが。…悪かった。」  
ガランは白い毛の混じった眉を寄せた。

薄々、雰囲気は感じていたが、獣神族内では、彼は孤立しているらしい。こう大人しいだけで、獣神族からは軽蔑の元なのだ。

「いや、いいんだよ。本当の事だ。俺は戦うのが怖い。今度の進軍だって、集落に残って臆病とからかわれるのが嫌で加わったようなもんだ。」

ルリは黒曜石のように黒く光る目をドリラムに向けて、じっと黙っていた。

「ガラン先生、ルリ。俺、ここにいると故郷にいる時よりずっと居心地良く過ごせるよ。二人とも優しいもんな。」  
ドリラムは朗らかに笑った。

「…冷えますよ、火に当たってください。」

クルリはぼんやり立っているフウマに言った。

彼は声をかけられたのに驚いてクルリを見、「…ああ。」と呟いた。  
クルリは夕飯の調理のために焚いた火の番をしている所だった。

「入らないんですか、テント。」

クルリはさりげなく聞いた。

クルリの焚いた焚き火のすぐ近くに医務用に立てられたテントがある。

ルリはそこにいるはずだった。

フウマは沈黙したままだ。無視されたのかと思ったが、しばらくして答えが返ってきた。

「…中に患者がいるようだから。」

クルリは意外に思ってたフウマを見た。

ルリに会いに来た事を、彼は素直に認めた事になる。

クルリの顔に微笑みが浮かんだ。

彼はもう気が付いたのだろう。自分の気持ちに。



ルリに好意を持っているという事に。

その時、テントからのそりと誰か出て来た。

獣神族の男だった。

「あの男、毎晩来てるな。」

フウマがそう言ったので、クルリも男の顔を確認してみたが、どうだったかよくわからなかった。テントは人の出入りが激しいのだ。いちいち顔を覚えていない。

クルリは思わず意地悪っぽく言っていた。

「心配ですか。ルリ様に気があるのかもしれないし。」

フウマは心なしか渋い顔をしてクルリを見返した。

このクルリという男、人見知りが激しいが、近頃は大人慣れてきたらしく本来の性格が見えてきた感じがする。

「最初に言っておこうと思いますが、フウマ様。今ルリ様のご両親代わりが出来るのは私しかいません。その責務を重く受け止め、果たして行く上で、フウマ様の動向を注意深く拝見させて頂こうと思います。」

クルリはにこやかに微笑んで言った。

このセリフを年頃の娘を持った親父風に言えば、うちの娘に下手な事したらぶっ飛ばすぞこの野郎、と言った所だろうか。

「……。」

フウマはしばらく絶句してクルリを眺めていた。

隔絶の壁は、名に相応しい、巨大な石壁だった。

獣神族の二倍はある高さに、横は小さな集落なら丸ごと包み込めそうなほど長く続いている。

一体どれ程の労力を上げて築き上げたのだろう。

隔絶の壁前に、人間が隊列を組んで待ち構えていた。

その数、ざっと千人はいそうだった。

数はいつも人間が上回る。

その目と鼻の先に、異形の者も隊を敷いて今か今かと突撃の合図を待っていた。

ガランやルリのいる陣ははるか後方である。ドリアムはそつと振り返った。

陣の中心に高い棒が据えられていて、その先端に赤い旗が掲げられている。

もし万が一にも敗走したら、その旗を目印に逃げ込むのである。

遠く、乾いた起伏の激しい大地に、ぼつんと見える赤いのがそれだとドリアムは思った。

それだけで何となく心が落ち着いた。

「おい、仕掛ける前から逃げ出すんじゃないぞ。」

「いや、逃げてもらった方が俺達の邪魔にならなくて助かるぜ。」

後ろを振り返っているドリアムに、左右に並ぶ獣神族兵が口々に罵り立てた。

唇を噛んでドリアムはうつむいた。

ドリアムは両親や兄弟にまで臆病である事を罵られて生きてきた。

自分の何分の一の大きさでしかない鹿を一頭狩るのに、冷や汗でビツシヨリになる。

戦のための鍛錬で牙の使い方を習うと、恐ろしくて夜も眠れない。

獣神族たるに必要なステータスは唯一つ。

勇猛果敢であること。

逆に言えば、そうでなければ獣神族として生きる資格も剥奪される。ドリアムは獣神族の中で生きてきて、一度も心が安らかになつた事がなかった。

何の心配もなく、初めて心から笑ったのは、獣神族の集落を遠く離れた、陣中の医務用テントの中だったのだ。

笑顔が魅力的で、笑いかけられるとついこちらも笑顔になってしまふルリや、いつも面白い話を老人独特の穏やかな口調で話してくれるガランが、ドリアムは好きだった。

罵っていた兵が不意に口をつぐんだので、ドリアムが顔を上げると、

犬神族の村長サソリが隊列の先頭に歩み出た所だった。

この戦場でただ一人の女性であるため、その姿はかなり目立つ。さらにその後ろから背の高い茶髪の男と、小柄な銀髪の少年が付いて行く。

ドリアムは戦場にどうしてあんな若い少年を連れて行くのかと驚愕して見守っていた。

サソリが高々と右手を上げる。

それが合図だった。

一斉に犬神族百名が風のように飛び出した。

ドリアムは鳥肌が立った。

一人一人が矢のように人間の隊列に突っ込んでいく。

これが犬神族の戦い方。

獣神族とは全く異なるものだった。

目で追いつかないほどの早い動きで相手を攪乱し、石にすら突き刺さる鋭く頑丈な爪を見舞う。

その様はまるで踊るようだ。一舞いする度に血煙が吹く。

千人の人垣が、たった百人に乱されていく。

その時、凄まじい雄叫びが戦場を貫いた。

獣神族長、ガブが吠えたのだ。

それが、獣神族突撃の合図だった。

「さっさと進め！」

硬直して動けないでいたドリアムの後ろにいた兵が叫んだ。

しかし、ドリアムはそれでも動けない。

「ほっとけそんな奴！」

誰かがそう言い、ドリアムの後ろの兵は次々にドリアムを突き飛ばして人間の隊列に突き進んでいく。

獣神族の戦いは、犬神族とは間逆の力勝負だった。

獣神族にとって、人間が放つ矢の一、二本は刺さってもどうという事はない。

猛進して行き、手当たり次第その丸太のような腕で相手をなぎ倒し、

牙で肉を骨を噛み砕く。

不気味に静かだった戦場は、獣神族の参入で、一気に怒号と唸り声で一杯になった。

ドリアムは、震えながらその様を見ているしか出来なかった。

獣神族が隔絶の壁に体当たりを始めた。

一発二発とやるうちは、揺らぎもなかったが、体当たりをする人数が五、六〇名程にもなると、壁はだんだん、大きく揺らぐようになっていった。

十度も当たった頃だろうか。隔絶の壁が恐ろしい音を立てるのを聞いた。

「あつ！」

ドリアムは思わず声を上げた。

少し離れたドリアムの目にも、壁に大きな亀裂が生じたのが見えたのだ。

もう一押しで、壁は崩れる。

嬉しさでドリアムの目は思わず、ガランやルリのいる陣のほうに向かった。

しかし、思いも寄らないものが目に飛び込んできた。

土煙が上っている。

赤茶色の大地を疾走する、おびただしい数の人間の騎馬隊が一直線に森へ向かっているではないか。

森の前には陣がある。

赤旗は土煙で全く見えない。

叫んだ。

ドリアムの頭は真っ白になった。

かなり経ってから、自分が陣に向かってずっと走っていた事に気がついた。

鈍足な獣神族は我を忘れると、驚く程俊足になると誰かに聞いたが、自分が今きつとそうかもしれない。

ドリアムは思わず泣きそうになった。

これと言っていたのはガランだった事を思い出したからだった。

サソリは違和感をずっと消せずにいた。

戦況はほぼ一方的にこちらが押している。

しかし、どうにもおかしい。

手応えがないのだ。

「村長！」

「！シユンか。」

剣や槍をヒョイヒョイ避けながらシユンがサソリのすぐ横にまでやって来た。

「こいつら戦う気あんのか？なんつつうか抵抗がないっていうかさあ。」

シユンが自分の思っているのと同じ事を言った。

それでサソリは自分が思っているだけでないことを理解した。

「俺も戦争としてまともに人間とぶつかったのは初めてで、よくわかんねえけど、今の感じはどうも良くねえと思……」

突然ズシンッと地響きがして、二人が顔を上げると、ガブが隔絶の壁に体当たりをかましているのだった。

また違和感が増えた。

長年、隔絶の壁と呼ばれた、戦争の象徴であるこの壁に簡単に攻撃を許すとは。

それとも、これが人間の實力なのか。

嫌な予感がした。

ついに壁にヒビが入った時だった。

ガブにも負けない凄まじい雄叫びが戦場を駆け抜けた。

「?!」

誰だ？何を知らせる雄叫びだ？

サソリは声の主を探した。戦場ではない。少し離れた位置から聞こえた。

声の主は見つけられなかったが、代わりのものがサソリの目を釘付けにした。

「全軍撤退！！」

次の瞬間サソリは大声で叫んでいた。

事情の飲み込めない異形の兵達に動揺が走る。

「この人間どもは罔だ！各自、追撃を撒きつつ即刻、陣に帰還せよ！」

サソリの視線を追ったシユンの目に、遠くの大地で大きな土煙が上っているのが見えた。

大勢が移動している証拠だ。

真っ直ぐ陣へ、そして森へ向かっている。

異形の者が撤退を開始した途端、人間の猛追が始まった。

サソリは大きく舌打ちを打った。

全て作戦だったのだ。掌の上で転がされていた！

突如、隔絶の壁の上から矢が雨のように降って来た。頑強さを誇る獣神族がハリネズミのように全身に矢を受け次々倒れていく。

「村長！伏兵だ！」

シユンの報告にサソリは耳を疑った。

「馬鹿な！犬神族の鼻と耳を持って、何故見破れなかった？！」

そういつている間にも、道の左右の起伏から湧き水のように、見た事のない黒い鎧に身を包んだ人間がドツと溢れて来た。

サソリは直感した。出兵前にクルリの言っていた鉄の鎧だ。

「気をつける！爪が利かないかもしれない！」

サソリは大声を出したが、もう遅かった。

犬神族は初めて爪の通らない堅い防具を前に、混乱に陥った。

思考が止まってしまえば、いかに犬神族といっても、人間の方が数で圧倒的に勝っているのだ。取り囲まれ、四方から槍で突かれれば一たまりもなかった。

サソリの目の前で、同胞が次々に倒れていく。

敗戦。

「血路を開け！一人でも多く村に戻るんだ！」

村から遠いこの地で、村の守り手は打ち倒され、大軍の人間が目の前で侵攻に向かっていている。

なんておぞましい光景。

その時、肩にズシツと重い衝撃が走った。矢が刺さっている。

刺さって尚、サソリは信じられず、その矢を見つめていた。

私が、のろまな人間の矢を自分が受けたというのか。

「母さん！！」

ハッとしてサソリは目を上げた。

自分に向かって剣を振り上げていた黒鎧の人間の首が飛んだ。

首を切り落とした人物がサソリを庇うようにして傍に立っていた。

神秘的な美しい銀髪が舞う。

サソリは思わず涙が出そうになるのを必死でとどめた。

後姿がそっくりじゃないか。

いつの間にか、この子はこのように父親に似たのだ。

サソリは刺さった矢に手をかけ、一気に引き抜いた。

痛みで頭が一瞬痺れ、すぐにスツと冴えていく。

戦場で感傷的になるなど、どうかしていた。

「助かったフウマ！私はもう大丈夫だ！お前は急いで村に戻ってくれ！」

フウマが少し戸惑ってサソリを振り返った。

「村長は俺が守って村まで行くから！お前が一番足速いし、無事に村行き着いた兵をまとめる奴がいるだろ。俺達はここで追撃食い止める！」

シユンがどこからか取ってきた人間の武器の鉄剣を担いでやって来た。

よく見るとシユンだけではない。フウマも、今戦って踏みとどまっている者は皆人間の武器を奪って戦っている。

「へへ、皮肉なモンで、人間の作った防具には人間の武器が一番ってね。」

サソリの目線に気付いて、シュンが担いでいた剣を一本サソリに渡した。  
なるほど、異形の者の筋力なら、人間よりもずっと強く鋭く剣を振れる。

剣の殺傷力が人間にとって仇となったのだ。

「フウマ！行け！！」

フウマはゴウツと風を唸らせて飛び出した。

一瞬で遠のいた息子の背中をサソリはもう振り返らなかった。

「爪や牙が通じないなら、人間の剣を奪って戦え！一人でも多く生き延びて村に戻るぞ！」

サソリの号令に、異形の兵達がオオーツと応じた。

こんな結果になると、誰が予測しただろう。

こんな大敗戦になるとは。

ギリギリと歯を噛み締める。

全速力で走りながら強く噛み締めたせいで、口の中が切れて血の味がして来た。

馬の蹄鉄の跡が、大地に敷き詰めたように隙間なく広がっている。  
人間の通った上を走っているというだけで、フウマの心は燃えるような憎しみに包まれた。

フウマの鼻には、もう臭ってきていた。

木や布の燃える臭い、さらには血の臭いも肉が燃える臭いも。

陣に立てた赤い旗は燃え落ちて、黒煙が昇っているのが見えるばかりだった。

「…殺してやる…！殺してやるぞ…！」

村も母も心配だが、今心を占めるのはただ一人だった。

あの黒髪が血に染まっているのを見たら、自分はもう正気を保ってはいないだろう。

「人間を一人残らず殺して回ってやる…！」



フウマは搾り出すように呟き続けた。

そうしなければ口の中が自分の牙で血だらけになってしまう。

フウマには永遠に思えるほど長かったが、実際、陣に辿り着いたのはあつという間だった。

「ルリ！ルリはいるか？！」

一つ残らず焼かれたテントの燃えカスを縫うようにフウマは陣の中を回った。

ひどい炎だったのだろう。地面も黒くすすけている。

薄い黒煙の中、陣の中を回っていたフウマは驚いて目を見張った。

一つだけ、炎を逃れて無事に立っているテントがある。

奇跡のようだった。焼けていないのはそのテントだけなのだ。

記憶と照らし合わせれば、そのテントは医務用に立てられたテントだった。

垂れ幕をめくって中を覗いた瞬間、フウマはのど元に短剣を突きつけられた。

「…フウマ？」

ルリはフウマを見ると、慌てて短剣を引つ込めた。

ルリは少し青ざめているが、今朝、出陣を見送るために顔を見せた時と同じ格好のまま、どこも怪我なく、無事な姿だ。

「フウマ？平気？」

へたり込むように座ったフウマを見て、ルリはさらに慌てて、フウマの顔を覗き込んだ。

「ごめんね、また黒い鎧の人かと思って…」

短剣にビビって座り込んだように見えたらしい。違うと言いたかったが、フウマは安心のあまり全身の力が抜けて、しばらく口すらうまく動かせなかった。

「よく……、よく無事だったな……。」

やっとそれだけ言った。

するとルリは、ゆっくり頷いて、テントの奥に顔を向けた。

奥には二、三人の患者を寝かせるだけのスペースがあり、見てみれば、ルリの他に、クルリと薬師のガラン、他に給仕係で従軍していた村の者四人が身を寄せ合っている。

これが生存者全てらしかった。

そして、その中心に、獣神族の遺体が安置されていた。

ひと目で、眠っているのではなく、死んでいると分かるほど、体の損傷がひどかった。

手足は火傷で皮膚が黒く、どこかおかしな方向に曲がっている。

おそらく骨が幾重にも折れているのだ。馬に踏まれたのだろう。あの硬い鎧と戦ったなら、殴りかかって折れたのかもしれない。

胴体は真っ赤に血で染まり、矢を抜いた跡が幾つもあった。

しかし、こんなにも凄惨な姿で死んだこの獣神族の顔は。

「笑って死んだよ。顔だけ見れば、まるで良い夢でも見ているような表情だろ。」

火に当たったためか、縮れてしまった白髪を尻尾で撫でながら、ガランが静かに口を開いた。

「信じられるか、村長の息子。こいつはな、ついさっきまで生きていたんだよ。この怪我でだぞ。」

身を寄せ合っていた四人がすすり泣くのが聞こえ始めた。

「このテントを守りきって、安心したんだろうな。嬉しそうに笑って、死んだ。」

フウマはこの青年が、毎晩このテントに来ていた獣神族だと気がついていた。

「名を、覚えてやっておいてくれ。…ドリアムという。獣神族に聞けば誰もが知ってる、一族で一番の臆病者だそうだ。…たった、たった三晩薬をやって、話し相手になっただけのわし等を、魂を捧げて守ってくれた。」

フウマはドリアムの傍らにそっと片膝をついた。

焼け焦げて、肌の触感を失った腕に触れる。胸一杯に何か流れ込んでくる。

あんたは手本を見せてくれた。

憎いからでなく、守るために戦って命を捧げる事の偉大さを教えてくれた。

引き継ごう。

俺はあんたが守ってくれたものを命を懸けて守る。

だから、安らかに。

## 第五話 再起

全てが手遅れだった。

帰り着いた故郷はもう跡形もない荒地だった。

一度だけフウマは天を仰いだ。

過ぎた時間が戻って来るのを待つように、長くうつむく事はなかった。

サソリは魂が抜けて落ちたように、しばらく身じろぎもしなかった。夜になって肌寒くなったのを気にして、シュンが燃え残った毛布を探してきてサソリの肩にかけたのにも気が付いてないようだった。犬神の集落は壊滅していた。

砲弾に石積みは原型もないほど破壊され、家の家具は残らず炭になっ

っていた。サソリとシュン達、生き残りの兵が村に、いや、村だった場所に戻ってきたのはフウマが辿り着いた次の日の昼だった。

出兵した犬神族百名は六十名に、獣神族三百名は百五十名に減っていた。

フウマは一度サソリとシュンに顔を見せたきり、どこかに出かけてしまっ

てここにいない。……この一大事にどこ行きやがったあいつ。」

シュンはサソリの傍に控えて呟いた。

その声もサソリには聞こえていないようだ。

サソリはこの村を守る事に命を懸けてきたつもりだった。

夫から引き継いだこの地を死ぬまで見守り果てるつもりだった。

村が焼けただれて原型も留めない今、どうして自分は生き延びているのだらう。

夫の代わりのように大事にしていた銀獅子のつい立も燃えて残って

いなかった。

いつそ自分も一緒に燃え尽きたかったとさえ思う。

「村長！村長！ウォルだ！！」

シユンの叫び声にサソリは少し眉を動かした。

村の自警を一手に引き受けるウォルは、実力者だが万一のために村の警護に残っていたのだ。

ウォルは疲弊しきった顔をしていたが、怪我もなく、彼本来の明るい表情を失ってなかった。

「村長、すいません俺：任されたのに村をこんな有様にして…。」  
ここまで走ってきたのだろう。まだ肩で息をしているウォルは息を整えながらサソリの前にやって来た。

「でも、全滅はしてません！集落に残っていた女子供は、ほぼ守りきって魚神族の集落にまで送り届けました。ここに踏みとどまった自警団の連中はかなりやられました。五十名は生き残りました。多分自主的に逃げた奴等もいるはず。だから見た目ほど犠牲は出ていない…。」

「もう、いい。」

サソリが息を吐くように呟いた。

ウォルとシユンがじっとサソリを凝視する。

「私は、村をこんな姿にした馬鹿な村長だ…。そんな報告を私にしないでくれ。」

「…しっかりしてくれ村長！済んじまった事なんだ。あんたがそんなんじゃ死んだ皆が浮かばねえよ。」

シユンの言葉に一瞬サソリに自嘲的な笑みが浮かんだ。

「そうだな。私ばかりがのうのうと生きていては皆に悪い。死んで詫びたいよ…。」

「…村長！」

ウォルがさらに言い募ろうとした時、肩をガツと掴まれた。  
フウマがいつの間にか戻ってきていた。

「ウォル、生きてたんだな。」

「はい、フウマ様。：村はこんな事になってしまいましたが、多くはここから一番近い魚神族の所に避難しました。」

言い終わってフウマを見上げた瞬間、ウォルは思わず目を見開いてしまった。

かすかにフウマが微笑んでいる。

「…そうか。良かった。」

微笑んでいたように見えたのは一瞬で、瞬きした刹那には無表情のフウマに戻っていた。

休まず全力疾走して戻って来たせいで、目が疲れて幻覚を見たのかもしれない。

ウォルは表情を失ったフウマ六歳の時から十年間、彼の笑った顔を見たことがなかったのだから、そう思うのも無理はなかった。

「あ、この馬鹿フウマ！どこ行つてやがったよ。」

「悪い。」

素直に謝られてシュンは面食らった。

こんな戯言はもちろん黙殺されると思っていたのだ。

会ってなかったのはほんの一日半だというのに、フウマの雰囲気はどこか変わった。

「村長、この大事に傍を離れてすみませんでした。」

そう言ったフウマの横から、黒髪の小さな頭がヒョイツと現れた。

「サソリ様、フウマがここ離れたの私達を迎えに行つてたせいなんです。フウマを怒らないで下さいね。」

「ルリちゃん、無事だったのか！焼けちまった陣の中を随分探したんだぜ。」

ルリは満面の笑みをシュンに返した。それだけで空気がガラリと明るくなる。

シュンは普段通りに振舞っていたつもりだったが、本当に自然体のルリを見て、自分が必死で空気を振りまいていただけだという事に気が付かされた。

思わず苦笑する。ルリは自分の村を焼かれここに逃げ延び、そして

今度は逃げ延びた村も壊滅したというのに、普段のように自分に笑いかけたのだ。

この少女は大物だ。

「私達、フウマの速度には到底付いていけないから、別行動でゆっくり村に進んでたんですよ。みなさんは多分急いで追い越されたから気が付かなかったのかも。私達も追い抜かれたの気が付かなかったですし。」

シユンは少し首を傾げた。

急いでいたからといって、人間の残党に注意しながら進んでいたのだ。

犬神の嗅覚がルリ達を捉えなかったのは少し不思議だった。

「……ルリ、お前には悪い事をした。」

かすれた声でサソリが言った。

このかすれは戦場で声を嚙らして叫んだためだが、まるで一気に老けてしまったようで痛ましかった。

「好きなだけこの村に居れば良いと言ったばかりなのに。村が壊滅するとは……。」

ルリは真つ青な顔をしたサソリをじつと見返した。

そして、珍しく遠慮がちに口を開いた。

「……そんなに心を痛められているサソリ様の前で言うのは難ですが、私は村がなくなる前と少しも気落ちしてませんよ。」

サソリの顔は険しくなった。

思わず皮肉口調に言い返している。

「異民族のお前だ。犬神の地がなくなろうとそう心痛むものでもないだろう。」

ルリは優しげに笑い返した。

「サソリ様、私もここに来る前は村どころか、両親も村の者も全て失いました。」

サソリはハッとして口をつぐんだ。

その事実を忘れたわけではなかったのに。

ルリの明るさを見ている内に、その事実が遠くに追いやられてしまっていた。

ルリは優しい笑顔のままだ。それが返って自分の言葉の無用心さを浮き彫りにする。

その瞬間、長い眠りから醒めたように、ようやくまともな思考力が戻ったような気がした。

「すまない。どうかしていた。何て愚かな事を…」

「いいえ。実際、自分が生まれ育った村でないから、気落ちも少ないのだと思いますよ。私も自分の村に帰れない事を納得するのに随分苦労しましたから、皆さんが今どんなに辛いか少しはわかってるつもりです。」

サソリもシュンも、みんなルリを見返したままじっと聞き入っている。

「私、昔から明るいだけ取り柄だつてよく言われてました。お父さんもお母さんも常に前向きでいられるのが私の最大の長所だつてだから逃げる時、決めたんです。生きてる限り後ろは見ない事。前だけ見て生きて行く事。」

暗く寒い風が吹くこの荒地を、ルリの朗らかな声だけが響き渡っていた。

ルリの笑顔はこの信念に裏打ちされているから、こんなに強い。そしてあんなにも眩しく光るのだとシュンは思った。

「せつかくこんなに残ってるんですよ？これからどうするか、何をして生きるか。楽しい事考えましょう！」

ルリが明るく言った。

サソリは目を細めて、懺悔するように何度も何度も頷いた。

「村長、この地は捨てましょう。」

フウマがキツパリした口調で言った。

シュンは驚いてフウマを見た。提案の内容ではなく、フウマが方



針を提案するという事自体に。今までそんな事は一度もなかったのだ。

「集落を作るには大神の一族はあまりに少数民族となってしまう。これからは各民族に身を寄せて生きていくべきです。」

サソリもポカンとした顔で相変わらず無表情の息子を見守っている。

「そ、そうだな……。少数で森の最前線にいるのはあまりに危険だ。そうするしかないだろう。」

「サソリ様、サソリ様。私も提案があるの！」

楽しそうにルリが手を上げた。

サソリはまだポカンとした顔のままルリを見た。

「あのね、犬神族のみんなって足が速いでしょう。村同士の連絡係になればいいと思うの！」

「連絡係？」

ウォルが聞き返す。

「この敗戦の原因は、人間の作戦を読めなかった事だけじゃありません。最大の原因は兵力不足です。」

フウマがまたキツパリ言った。

ルリ以外の三人は開いた口が塞がらないほど驚いている。

「だいたい、こんなにハキハキと長い言葉を述べるフウマを見るのは初めてだ。」

「シュンはどうしたお前、と言いそうなのを途中でやめて気を取り直して同意した。」

「確かにフウマの言うとおりだよ村長。人間はそれこそ湯水のように兵が居る。一つに団結しているからな。俺達は民族同士、疎遠な奴等もいるし、悪くすれば対立してるような民族もあるじゃねえか。これまではそれでも均衡が取れてた。でも、人間の扱う武器があんなに改良された今、俺達だって変わっていかねえと滅ぼされるの待ってるようなもんだ。」

嬉しそうにルリは頷いた。

「そう！だから犬神族が各地に散らばって、皆をまとめるの！」

まとめると一口に言っても、大変に実現困難な事だが、夢のある提案だ。

故郷を失って打ちひしがれる者にはこれ位が丁度良いに違いない。サソリはフウマとルリを交互に見つめた。

「二人でこの考えを思いついたのか？」

「はい。フウマが迎えに来てくれて、ここに辿り着くまでに話してたんです。」

「思いついたのはルリですよ。」

「どうすれば犠牲が減るかかって聞いてきたのフウマだよ。」

ルリが来てからというもののフウマの変わりようは著しかったが、今日ほどその事を実感する事はなかった。

フウマの止まっていた時間が動きだしたのだ。

サソリはそれを肌で感じた。

「村長、どうする？」

決断を促してきたシュンに頷きかけると、サソリは立ち上がった。

「集合！！」

のどが哽れて痛いはずなのに、張り上げたサソリの声には力がみなぎっていた。

思い思いの場所ではんやりしていた犬神兵がサッとサソリの前に集まった。

「我等はこの地を捨て、それぞれ他民族の村へ移ることとする！」

サソリは兵一人一人の顔を見渡した。みんな失望と疲労で、死人のような顔をしている。

「だが忘れるな！ただ移るのではない。我等の機動力を活かし、それぞれの村の交流を促すのだ。我等異形の民も団結しなければ生き残っていけないことを各民族に理解させ、人間に対抗するのだ！それをこれから我等の使命として生き抜いていこう！」

兵達にはわかに顔を上げ、ざわつき始めた。

ざわめきはやがて歓声となり、大きな雄叫びとなって森を駆け抜けた。

夜中、月明かりの中を忍ぶように立ち上がったルリをフウマは見ていた。

明日にはここを出て、魚神族の村に行って生き残りの犬神族と合流する予定である。

今夜は各々、枯葉を大量に集めて敷き詰め布団代わりにしたり、大きな石を風除けにして野宿していた。

フウマは仮眠を少しとった後はずっと見張りに起きているつもりだったので、一人背の高い木に登り、気配を探っていた。

そこへ、ルリが一人で村の焼け跡に歩いていくのが見えたのだ。フウマは音もなく木から降りた。

ルリは月明かりが最も良く照っている場所で何か作業をしていた。明かりが欲しかったらしい。

「…何してる？」

フウマが音もなくルリの後ろまで来ると言った。

ルリは心底驚いたようで、飛び上がった。

「やだ、フウマ！脅かさないでよ！」

他の者を起こさないように、ルリは小声で怒った。

「それは…」

ルリの手に握られているものを見て、フウマは口をつぐんだ。

ゴツゴツしたルリの人差し指の長さほどもある牙が二本、その手に握られていた。

こんなに大振りな牙の持ち主は獣神族しかない。

それですぐに誰のものか予測が付いた。

「ドリアムの牙か。」

「…うん。」

目の裏には凄惨な姿になったドリアムがまだ焼きついている。好きな者達を守るために命を捧げた青年。

遺体は彼が死んだあの荒地で焼いてきた。異形に死者を埋葬する習慣はない。死ねば体は物であり、木や枯葉と同じように火にくべる。焼くのも、腐って腐臭がしないようにするための処置だ。

フウマは村へ急いで立ったので、ドリアムの遺体を燃やす所を見届ける事は出来ず、ルリが牙を抜いて持ち歩いているのも知らなかった。

「犬神族は呪術とか信じるのかな？」

唐突にルリが聞いた。

「呪術か？ やった事もないし、見た事もない。人間がやるものだと聞いていた。」

「そうなんだ。私の村ではね、普通に行われてたんだよ。父は占い師だったの。昔から病気をするのは体の中に悪い精霊が入ったからだと信じ、占い師や呪術師が処方したの。それで父は薬にも詳しくなかった。」

親の事についてルリが詳しく語るのは初めてだった。

フウマは静かに聞いていた。

「私の村では死んだ者の魂は口から出て行くとされていたの。だから、牙は最後に魂が通った所とされて、形見に持っていると守ってくれるって言われてた。」

そう言っただけの自分の持っている短剣を抜いて、ドリアムの牙に当てた。紐を通すための穴を開けようとしているのだ。

「…貸してみる。」

フウマは牙に爪を突き刺した。あっという間に小指の先程の大きさの穴が開く。

ルリは医務用のテントにあって火の手を逃れた、なめし皮を紐状にしたものを取り出した。

開いたばかりの穴に紐を通し、二つの首飾りにした。

「はい、フウマ。」

その内の一つをルリがフウマの方に差し出した。

「え…っ」

フウマは硬直して差し出された牙の首飾りを見た。

まさか自分のために作っているとは思わなかったのだ。

フウマが動かないので、ルリが「いらない？」と不安そうな顔で覗き込んできた。

フウマは少し慌てて「いや、もらう。」と首飾りを受け取った。

「一つはフウマに。もう一つはガラン先生にと思ってただけで、先生はもう古い先短い老人だから守ってもらう必要はないって言うの。だからこっちは私が付けてる。」

そう言くと、残ったもう片方の首飾りを自分の首に掛けた。

華奢なルリが付けるには、ドリアムの牙はいかつ過ぎるようにも見えたと、同時に頼もしくも感じた。

フウマは呪術など全く信じないが、その牙には本当に守ろうという意志が宿っているように見えたのだ。

「これを見ると、気が引き締まる。」

フウマが手の中の冷たい牙の感触を確かめながら言った。

この牙の持ち主には多くのことを誓ったばかりだ。

俺には良い戒めだと思った。

ただ憎しみで戦うのではなく、戦いは守るためにあるのだということとを忘れないための。

ドリアムの元を離れて村に向かう途中、色々な事を考えた。

自分の守りたいものは何か。どうしたら守れるか。

それを考えながら走っていると、人間への度し難い憎悪は浮き上がってこないのだった。

「ほら、フウマも首に掛けて。」

ルリに促されてフウマはそろそろと首に掛けた。

恐る恐るになってしまったのは、これを掛けると一つ懸念が生まれるからだ。

ルリが嬉しそうにその懸念をズバリ言い当てた。

「おそろいだね。」

「……。」

シュンに見られたら、何てからかわれるか分かったものじゃない。  
ましておそろいじゃ、他の誰から見てもそうさういう関係に見られるだ  
ろう。

かすかに青くなったり赤くなったりしているフウマをルリは不思議  
そうに見ている。

牙はまるでそんなフウマを笑うように、月明かりに照らされてツヤ  
ツヤと光っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6393c/>

---

闇より黒い

2011年1月2日14時31分発行